

牛久市文化財保護審議委員 栗原 功

川村理助(現・岡見町出身)と吉田弥平(現・上柏田町出身)①

—明治・大正時代に東京高等師範学校の教授として奉職—

川村理助(荊編)

東京高等師範学校の教授として奉職



川村理助 (慶応3年(1867年)～昭和22年(1947年)) 和歌山師範学校校長時代

川村理助は、江戸幕府の徳川第15代将軍慶喜が朝廷(天皇の政庁)へ政権を返上(大政奉還)した慶応3年(1867年・翌年明治に改元される)に河内郡岡見村(現・岡見町)の農家・川村半左衛門の二男として出生している。明治8年(1875年)に9歳で岡見村の下等小学校に入学、ついで中等小学、上等小学に進み14歳で卒業。16歳で茨城師範学校※に首席入学、19歳で同校を卒業した。

明治20年(1887年)3月、20歳で東京高等師範学校※に入学し、同23年3月、同校の博物学科を卒業した。卒業式当日、川村は森有礼文部大臣※の告辞(つげざとすことば)と初代校長山川浩※の式辞に対し

て卒業生総代として答辞を述べた。(昭和6年(1931年)の東京高等師範学校創立60年記念式典で、今上天皇(昭和天皇)臨席のもとで卒業生総代として祝辞を述べている)。

明治23年から同27年まで東京女子高等師範学校付属の東京高等女学校助教授拝命。同27年に和歌山師範学校の首席教授を拝命し、同28年(28歳)に同校校長を拝命している。

明治32年(1899年)4月、東京高等師範学校の教授を拝命する。が、故あつて奉職1年余りで辞職して実業界に転じた。※師範学校は小学校(国民学校)の教員を養成した旧制の学校。明治19年(1886年)に森文相が制定した

師範学校令によって、国立(国立)を高等に、府・県立を尋常に分けた。 ※東京高等師範学校(中等学校(旧制中学校)教員を養成する)は、昭和24年(1949年)に東京文理大学と統合して東京教育大学となり、同校の伝統が継承され昭和48年(1973年)に筑波大学(現・つくば市)となる。 ※森有礼は、弘化4年(1847年)に薩摩藩士の子として生まれた。元治元年(1864年)新設の藩立開成所で学び、藩命で、慶応元年(1865年)イギリス留学(ロンドン大学)、同3年に渡米、帰国して新政府に仕え、外務官僚を歴任した。明治18年(1885年)第一次伊藤内閣の下で初代文相に就任し、『ドイツの(国家主義)教育を以って国家の基

礎を築かん』と、学制の全般的改正を行い、帝国大学令、師範学校令、中学校令、小学校令等の公布を断行した。師範学校では皆寮制をとり兵式体操を課した。森は本来国家主義的であったのに誤解されて、明治22年(1889年)2月に国粹主義者に刺され翌月没した。

※山川浩は、旧会津藩主(京都守護職)松平容保の側近だった。現役陸軍大佐(のち少将)で森文相に校長に起用され兼職した。高師は山川校長のもとで、教育勅語(明治天皇が發布した教育の基本方針)に示されている儒教的徳目を基礎にした忠君愛国などの教育の推進の要として寄宿舎生活から服装にいたるまで完全に軍隊化された。

川村が東京高等師範学校教授を辞職して30年余り、この間に嘗めた辛酸より体得大悟(さととり)した人生の基本的な理念が『捨我精進』であった。大正15年(1926年)5月、川村が校長に迎えられる東京府荊原郡等々力村(現・世田谷区東玉川)に『調布高等女学校(現・学校法人調布学園)』が設立された。『捨我精進』を学園の教育方針として掲げ、我儘を抑え他者を思いやる心を涵養し、精進を重ねて自己を高める指導が貫かれた。同校は、理事長の徳島県出身の西村庄平という民間人が全私財を投じて開校されたのであった。

調布高等女学校校長に就任 —川村が体得大悟した 人生の基本理念 捨我精進を校訓—



調布高等女学校校歌 川村理助 作詩 中山晋平 作曲



初代校長川村理助記念碑